

〈研究ノート〉

## 「言いわけ」の比較文化論 (二) — 民族の発明

柏岡 富英

はじめに

前回の議論<sup>1)</sup>では、特定の社会状況の中で行為を発動したり思いとどまったりするメカニズムとしての「言いわけ」を、ミクロ (個人行為) のレベルで考察した。ふつう「言いわけ」は、社会的にふさわしいと考えられる行為と、実際に起こってしまつた行為との間に生じるズレを埋め合わせるもの、と理解される。筆者はそれとは逆に、「言いわけ」とは社会的に承認された「動機のボキャブラリー」であり、それによって行為が触発される (抑止される) という図式を提示した。今回は、その図式をマクロ (集団) レベルにも応用できるかどうかを、「民族」という「近代の発明」にそくして考える。

「言いわけ」の「発明」

ここ一〇年ほどの間、書物に「〇〇〇の発明」という題名を

つけることが流行している。しかも興味深いことは、「発明」されたものが文化、血縁、思春期、母親、自我、死など、人間の生活に「もともとそなわっている」はずのものだということである。<sup>2)</sup> 日常の言葉遣いにおける「発明」が科学・技術上の創案や革新 (たとえば蒸気機関や電話) などを指すのに対して、彼らの中心的な論点は、「自然に与えられた」と一般に考えられている事象が、実は新しいものの見方や、それに伴う「言葉」(レトリック) によって存在を与えられるようになった、ということにある。

卑近な例でいえば、「熟年」という名前が社会的に承認されたカテゴリーになるまでは、人は中年のあと、すぐに老年になつたのだ。自分が「熟年」だとはだれも知らなかった。モリエールのムッシュウ・ジュールダンが、自分は生涯「散文」を喋っていたのだ、と気づいて愕然としたように。「現実」は発明されてこそはじめて「現実」として明確に認識されるようになる。

以前の「客観的事実究明」型のアプローチにかわって、フィクション（ないしテキスト）こそが現実を規定する（自然は芸術を模倣する！）というのが、「発明」派あるいは「現実の社会的構築」派の主張であった。

この見方は、筆者の言う「言いわけ」と基本的に異ならない。一旦発明され、社会に認知されたレトリックは、それ以降人々が自らを規定し、その規定にふさわしい行為をおこすための「動機のボキャブラリー」の一部となって、それまで人々が思いもしなかった欲望を喚起し、それに向かってエネルギーをチャネル化して行為を起こさせるであろう。

#### 近代的発明としての民族あるいはネーション

現代の世界を揺り動かしている社会力のうちでも最大のものは「民族」や「ナショナリズム」である。ところが、一九世紀になって、なぜ突如として民族が歴史の表舞台にとびだし、二〇世紀の終りにますます勢力を増してきたのか、そもそも「民族」や「ネーション」あるいは「ナショナリズム」が何を指すのかは、まさに百家争鳴、大筋の合意さえおぼつかない。その基本的な論争点については、すでに書いたことがあるので、近代になって「発明」されたレトリックという観点からの民族論の議論を整理しておくことが、この「ノート」の主目的である。なおここでは「注3」にあげた論文での議論にしたがって、「民族 (ethnie)」と「ネーション」とを同義と仮定し、とくに

使いわけをしない。(両方の言葉が入り交じっているのは、参照文献の言葉遣いにできるだけ忠実に従いたいためである。) また「ナショナリズム」は民族やネーションの自律を求める理念、およびそれにともなう政治運動と規定しておく。

むろん民族を近代の発明と捉えるといっても、だれか魂胆のある発明家が私利私欲のために何も知らない大衆を操作している、というのではない。また、現代以前には民族が存在しなかった、というのでもない。アンソニー・スミスが詳しく検証しているように、「民族コミュニティ」そのもの（あるいは、その原型）は、ほとんど有史以来といつていいほどの長い歴史をもっている。<sup>(4)</sup>しかし現代以前には、それは歴史の原動力ではなかった。したがって、ここでの問題は、近代化論（たとえばアメリカにおける「メルティング・ポット」論）の大前提とはうらはらに、なぜそれが一九世紀や二〇世紀という歴史的条件の中で人々のアイデンティティーの源となり、現代国家の基本的な構造原理となったのか、ということである。

エリック・ホップズボームとテレンス・レインジャーの『伝統の発明』は、長い民族的、国民的伝統と思われる文化的シンボル（スコットランドのタータンやキルト、ウェールズの民謡、王室の儀礼、旗など）が、実は最近になって発明され、広められたことを指摘して、強烈な知的衝撃を与えた。<sup>(5)</sup>「古い伝統」の多くは、現代生活への適応を容易にするため（逆にいえば、実際には機能しなくなってしまう）「伝統的生活」と現

代生活とのギャップを埋めるため)、あるいは国民感情に訴えて政治的結束力を高めるために発明された「ネオ伝統」であることが明かにされたのである。しかし、発明されたものは国家を支えるさまざまな装置にとどまらない。国家そのものもまた「発明された伝統」だと、ホップズボームは指摘する。

一般的に近代国家……は、新しく生まれたのではなく悠久の昔から存在し続けてきたことを主張し、また人為的に構築されたのではなく、「われわれはわれわれである」という以外には何の定義も必要としないほどに「自然」な人間共同体であることを主張する。「フランス」や「フランス人」という現代の概念がどのような歴史的連続性に彩られていようと——誰もそれを否定しようとは思わない——これらの概念そのものが「つくりもの」あるいは「発明」の要素を含んでいることは間違いがない。近代の「ネーション」を支えている主観的な要素の多くがこのような「つくりもの」であり、またそれらに見合った、総体として比較的新しいシンボルや、巧みに「誂え」た言語装置(たとえば「国史」)に取り囲まれていく限り、「伝統の発明」に細心の注意を払うことなしにネーションという現象を正しく研究することはできない。<sup>(6)</sup>

民族集団はいつからとは言えないほどの昔から、ずっと変ら

ずに続いてきた汚れない血統というイメージをまとっている(たとえば万世一系)。それは歴史上のいつかの時点で生まれたのではなく、歴史の始まる前から「あった」のだ。創世神話や伝統の連続性が強調されるのはそのためである。神話は一種の歴史でありながら、「ずっと昔」という以外の時間性を中和してしまう。したがって民族運動にまつわるさまざまな議論(民族運動家の主張自体を含めて)の関心は、民族の存在そのものには向かわず(それは自明の前提とされる)、そういう伝統や集団の存続をどのようにして守るか、という方向に向かいがちである。

「発明派」は、この「自明」の前提にラディカルな疑いを突き付ける。民族集団は歴史を超越した悠久の存在(「ありてあるもの」)などではなく、特定の歴史的条件の中で生成してきたものではないか。その歴史的条件とは、むしろ近代(とくに近代の国民国家)に特有のものではないか。民族の純潔や栄光、あるいは生得権といった考えは西洋の(ロマンティズムの?)産物であり、それが「近代化」とともに世界中に広がったのではないか。近代以前に、われわれが現在使っているような意味での民族(主義、運動、意識)は存在しなかったのではないか。逆に、最近になって、いくつもの民族集団が誕生したと見ていいのではないか。したがってまた、歴史的条件が変われば民族の社会的機能も変化し、あるいは消滅するのではないか。もう少しテクニカルな言葉を使えば、民族は独立変数では

なく従属変数なのではないか。民族は、「いろいろやってみて後に結局帰っていく心のふるさと」などではなく、階級や身分や地域などと並ぶ（競合する）社会構造原理の一つなのではないか。「発明派」は、むしろ、近代の民族運動が「砂上の楼閣」だとするものではないし、「虚偽意識」に支えられていると主張するものでもない。むしろ、現代世界における、おそらくは最大の原動力としての民族を、感傷や神秘のベールをはぎとることによって、ダイナミックな歴史的過程の中に正当に位置付けようとする試みなのである。

発明派の議論・ゲルナー、アンダーソン、ホップズ  
ボーム

「発明派」には二つのサブ・グループが認められる。第一のグループは、近代資本主義の発達によってネーションの出現を説明しようとする。一六世紀以来、資本主義は世界のあらゆる地域を単一のシステムのもとに統合した。資本主義的生産からある利益は「周辺」地域（東ヨーロッパや中南米）から「中心」国家（オランダ、イギリス、スペイン、フランス）に吸い上げられ、同時にこれらの国家は強力な政治体制を築き上げるにいたった。一九世紀になると、西洋のブルジョワジーはさらに力を増して、アジアやアフリカをも支配下に治め、資本はますます一極集中するようになった（これらの地域が「周辺化」した）。しかしこれによって、「中心」に対する「周辺」の抵抗

を喚起することにもなった。「周辺」のエリートは、かれらの「祖国」を西洋資本主義の脅威から守るべく、（それまでは「国民」という意識をもたなかった）大衆の「国民」意識に訴えざるをえなかった。すなわち、資本主義の世界的拡散による「周辺」の危機意識が、結果として「国民」を創出することになったのである。<sup>(7)</sup>

しかし、「周辺化」は非西洋の諸地域だけではなく、「中心」の内部でも起こった。中心国の内部でも、産業化は全地域にわたって均一に進行したわけではない。その結果、各地域ごとにさまざまな利害と発展水準をもつ集団が生じるにいたった。「中心の中心」地域は、自分に有利な資本配分を維持するため、さまざまな分業装置を発明し、それを維持強化しようとする。そこで、「中心の周辺」は、国外の「周辺」と同じように、独自の「国民」意識を喚起して「中心の中心」に抵抗を試みるのである。<sup>(8)</sup>

「発明派」の第二のグループは、経済よりも政治的な側面を重視する。近代以前の社会では、特定の社会集団のメンバーは、経済、宗教、文化など、生活の多くの側面が重なりあっていた（ある集団のメンバーであるということ、どの宗教の信者であるか、またどの言語を話すか、ということが一致していた。）ところが今日ではさまざまな社会関係が錯綜していて、個人の立場から見ると一人の人間が多くの集団に帰属し、集団の立場から見るとメンバーシップの均質性を保つことがむづか

しい。このような近代的状況のもとで、集団が権力、地位、プロセスなどを求めて競争に勝ち抜くためには、文化や感情に訴えて人々の統合をはからねばならない(人々を動員しなければならぬ)。その目的のために、民族やネーションは格好の磁場を提供する。皮肉な言い方をすると、民族運動は文化を全面に押し出すけれども、実は文化そのものが重要なのではなく、文化という「言いわけ」によって文化以外の目的を達成しようとする、というのがこのグループの主張である。民族は一種の凝固剤だというのである。<sup>9)</sup>この見方にしたがえば、宗教、言語、習慣、歴史など、ふつう民族集団の「よりどころ」とされているものがまずあり、それが原動力になって民族運動が起るのではない。民族やさまざまなシンボルは、競合関係にある集団が「われわれ」と「彼ら」との違いを強調するために援用する「境界維持メカニズム」だということになる。重要なのは民族の内容ではなく、われわれと彼らとは違っている、ということなのである。<sup>10)</sup>

以上が「発明派」の基本論調であるが、この立場をもっとも集約的に表現しているのはアーネスト・ゲルナー、ベネディクト・アンダーソン、そしてエリック・ホップズボームであろう。ゲルナーのみるところ、近代以前の社会では、文字とは縁のなかった農民大衆と「文字階級」であったエリートとは、文化的に全く異なった生活を送っていた。また、それで何の不都合もなかった。両者が共通の文化的枠組の中で競合する仕組みには

なっていないのであったのである。しかし現代の産業社会がうまく機能していくためには、社会的移動性が高く、文字という共通のコミュニケーション手段を使いこなす、ある程度以上の技術的熟練をそなえた、そういう意味で均質の労働者が大量に必要であり、その均質性は大規模な公共義務教育システムを通じてはじめて達成される。それを実行する能力は国家以外にはない。

近代化と工業化とが西洋から世界中に広がるにしたがって、非西洋諸社会の伝統的な社会構造や文化は破壊され、人々はそれまで営んでいた生活とは異なる、資本主義の原理にもとづいた生活を強いられるようになる。新しい生活形態は、それにすばやく馴染んだ人々には利益をもたらすかもしれないが、おちこぼれた人々の生活は悲惨である。むろん政府は公教育制度をととのえて、できるだけ多くの産業労働者を育てようとする。しかしもし人口の特定部分(地域集団や文化集団)が長期にわたって新しい文化技術(文字文化)から疎外され続けるなら、そこに二つの民族が誕生し、対立する可能性が高まる。とくに、この疎外された人口が、皮膚の色や宗教儀礼などのせいで、他の人々とはつきり見分けがつく場合(可視性が高い場合)、その可能性はますます高まる。

さまざまな集団が、それぞれの文化的伝統(あるいはそれが規定する生活の意味)にしたがって併存し、それによって希少財の争奪戦が生じないところでは、民族意識が芽生える余地はない。しかし、人口全体が一つの文化技術を共有することを強

いられ、技術習得の程度によって持続的な階層化が生じるとき（とくに「見える」印によって境界線を引くことができるとき）には、その階層は民族として自己主張を始める。この自己主張こそがナショナリズムそのものに他ならない。そして、それを生み出す社会的条件は、近代の工業化社会に特有のものである。ナショナリズムは既成のネーションが自己意識にめざめた結果ではなく、ナショナリズムこそが、それまでは存在しなかったネーション（民族集団）を發明するのだ——とゲルナーは主張するのである。<sup>11)</sup>

アンダーソンの「想像されたコミュニティ」論は、ゲルナーの議論を直接に受け継いだものと言える。ナショナリズムや民族が勃興した一八世紀終りから一九世紀は、ちょうど蒸気船や鉄道、なにかんづく印刷技術が飛躍的な発展を遂げた時代でもあった（印刷資本主義の時代）。この時代はまた、それまで生や死の問題、すなわち個人をこえた世界の構造の問題を一手に引き受けていた宗教が衰退した時期とも重なっていた。宗教の衰退と印刷物によるコミュニケーションの台頭は、人々の生活圏を旧来のコミュニティから一挙に拡大し、同時に、それまでは宗教が保証していた個人のアイデンティティーを極めてあいまいなものとしてしまった。そういう状況にあって、永遠の生命の宿りとして、また個人のアイデンティティーのよりどころとして、人々は「想像のコミュニティ」を必要とした。印刷された言葉がつくりだした「想像のコミュニティ」は、互

いに面識のない人々が、共通の時間と空間に属しているという思いを満たしてくれたのである。アンダーソンにとって民族は、世俗的資本主義のもとで、このような心理的、政治経済的欲求を満たしてくれる「想像のコミュニティ」の具体的表現に他ならないのである。<sup>12)</sup>

ホブズボームもまたゲルナーを引きながら次のように言う。ナショナリズムとは、文化単位と政治単位とが一致していなければならぬという信念であり、したがってそれは近代の領土的国家（国民国家）を前提としている。領土的国家という枠組と、文化と政治の一致という信念がまずあって、それが「ネーション」を生み出すのであり、その逆ではない。ネーションは、自然発生的あるいは「神意」によって与えられた集団（諸集団間の境界）として、政治的に自己実現しなければならぬ——というのは「神話」にすぎない。ネーションは、往々にして「長い文化的伝統」を發明し、あるいは本来に存在した文化的伝統を抹消することで、ネーションとして「つくりだされる」のである（ネーション・ビルディング）。

さらに、ネーションが誕生するには、一定水準の技術的、経済的発展が達成されていなければならない。たとえば、アンダーソンと同じようにホブズボームも印刷物によるコミュニケーションの重要性を指摘する。共通語（国語）が確立されないではネーションの成立は望めないし、共通語は、印刷物（あるいはその他のマスコミュニケーション）の普及、高い識字率、

義務教育の浸透がなければ確立されない。経済、行政、あるいは技術についても、時の権力が支配する全域にわたって一貫した制度が行き渡っていないければネーションとは呼べない。ある特定の地域あるいは文化集団が、構造的かつ持続的に他の地域で行われている制度から排除されているなら、その地域ないし集団は、遅かれ早かれ、独自のネーション（サブ・ネーション）であることを主張しはじめであろう。それは、まさに近代特有の政治概念なのである。<sup>13</sup>

まとめ

「発明派」は、ナショナルリズムやネーションあるいは民族が近代特有の社会現象であることをさまざまな角度から論証しようとする。人間社会の本性としてもとそなわっていたネーションや民族が、ついに開花した結果として近代的国民国家が生み出されたのではなく、近代的国民国家がネーション（民族）を生み出したのである。（国民感情や国民国家が概ね一九世紀以来の現象であるということ自体は、説明原理として「発明」に依拠しない政治史家の間でも、常識となっている。<sup>14</sup>）

むしろ、現代の民族集団やネーション、あるいはナショナルリズムの原型とも呼べるもの（類似現象）は古代にも発見することはできる（たとえば古代ギリシアのポリスや、「選民」としてのユダヤ、シーザーの軍勢に対するローマ人の抵抗）。エドワード・シルズによると言葉、宗教、人種、領土などといった

「原初的紐帯」は人間社会始まって以来今日にいたるまで社会の基層をなしてきたし、一つの社会を他の社会から区別する指標でもあった。<sup>15</sup>

しかし、いつの時代にも見いだすことのできる紐帯の原理であるということは、それが時と場所を越えてネーションや民族という形をとることを意味しないし、どの時代にも歴史の主役を演じてきたことを意味しない。（大帝国のダイナミズムはナショナルリズムにささえられていただろうか、また「階級」は二〇世紀の大部分を貫いた大原動力ではなかったか）。また、「客観的」な分析にしたがえば近代以前に民族やネーション（の原型あるいは類似現象）が認められるにしても、それがそのまま「主観的」に人々を行動にかりたてる「言いわけ」（動機のポキヤブラリー）であったという論理的必然性はない。（人は大昔から恋をしたらしいが、恋をもって結婚の前提条件とする社会制度は、ごく最近の、ごく限られた文化圏で普及しているにすぎない。）そうでなければ、新しい民族集団が誕生し、変化し、消滅するという現象を説明することができない。（具体的な事例については、たとえばシートン・ワトソン、スナイダー、オロンソラなどを参照。<sup>16</sup>）

歴史を動かすのは、客観的にみて正しいか間違っているかにかかわらず、「主観的に正しい動機」（信念あるいは盲信）がどれほど説得力をもっているかによる。客観的な妥当性と、人々の行動のエネルギーをチャンネル化する動機との間には、直接

の関係はない。かのヘルンスト・ルナンの言うごとく「歴史を歪めて理解することはネーションの重要な構成部分」なのである。<sup>(17)</sup> その歪んだ理解が近代史の原動力となったことを「発明派」は冷酷にも指摘したのである。しかしそれは「真実」をあげて、「正しき」認識に基づいた社会を築こうなどという安手の「科学主義」などでは決してない。

注

- (1) 柏岡富英、「『言ひわた』の比較文化論(一)——序論」、『日本研究』第4集 一九九一年三月。
- (2) たんねん: Joseph Adelson, *Inventing Adolescence* (New Brunswick: Transaction Books, 1985); Ann Dally, *Inventing Motherhood: The Consequences of an Ideal* (New York: Schocken, 1985); James J. Farrell, *Inventing the American Way of Death, 1830-1920* (Philadelphia: Temple University Press, 1980); Alvin Greenberg, *The Invention of the West* (New York: Avon, 1976); John O. Lyons, *The Invention of the Self* (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1978); Stephen Tatum, *Inventing Billy the Kid: Visions of the Outlaw in America, 1881-1981* (Albuquerque: University of New Mexico Press, 1982); Roy W. Wagner, *The Invention of Culture* (Chicago: University of Chicago Press, 1981).
- (3) 柏岡富英、「社会発展における『民族』の位置——概念の検討」、『関西外国語大学研究論集』三九号、一九八四年一月。
- (4) Anthony D. Smith, *The Ethnic Origins of Nations* (New York: Basil Blackwell, 1986).
- (5) Eric Hobsbawm and Terence Ranger (eds.), *The Invention of Tradition* (Cambridge: Cambridge University Press, 1983).
- (6) *Ibid.*, p. 14.
- (7) Immanuel Wallerstein, *The Modern World System* (New York: Academic Press, 1974).
- (8) Michael Hechter, *Internal Colonialism* (London: RKP, 1975); Tom Nairn, *The Break-up of Britain: Crisis and Neo-nationalism* (London: New Left Books, 1977).
- (9) Daniel Bell, "Ethnicity and Social Change," in Nathan Glazer and Patric Moynihan (eds.), *Ethnicity: Theory and Experience* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1975); Cynthia Enloe, *Ethnic Conflict and Political Development* (Boston: Little, Brown, 1973).
- (10) Frederik Barth, *Ethnic Groups and Boundaries* (Boston: Little, Brown, 1969).
- (11) Ernest Gellner, *Nations and Nationalism* (Oxford: Basil Blackwell, 1983).
- (12) Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (London: New Left Books, 1983).

- (13) Eric Hobsbawm, *Nations and Nationalism since 1780* (Cambridge : Cambridge University Press, 1990).
- (14) 久野義典 : Hans Kohn, *The Idea of Nationalism* (New York : Collier Macmillan, 1967) ; John Breuilly, *Nationalism and the State* (Chicago : University of Chicago Press, 1982).
- (15) Edward Shils, "Primordial, Personal, Sacred, and Civil Ties," in Edward Shils, *Center and Periphery* (Chicago : University of Chicago Press, 1975).
- (16) Hugh Seton-Watson, *Nations and States : An Enquiry into the Origins of Nations and the Politics of Nationalism* (London : Methuen, 1977) ; Louis Snyder, *Global Mini-Nationalisms* (Westport, Conn. : Greenwood Press, 1982) ; Victor A. Olorunsola (ed.), *The Politics of Cultural Sub-Nationalism in Africa* (Garden City, N. Y. : Doubleday, 1972).
- (17) Ernst Renan, "What is a Nation?" in Homi K. Bhabha (ed.), *Nation and Narration* (London : Routledge, 1990).